

唐代の龍門石窟に関する研究

-小窟、龕からの視点を手掛かりとして-

A Study about the Longmen Grottoes in the Tang Dynasty
- from the Perspective of Miniature Caves -

姚 瑶
YAO Yao

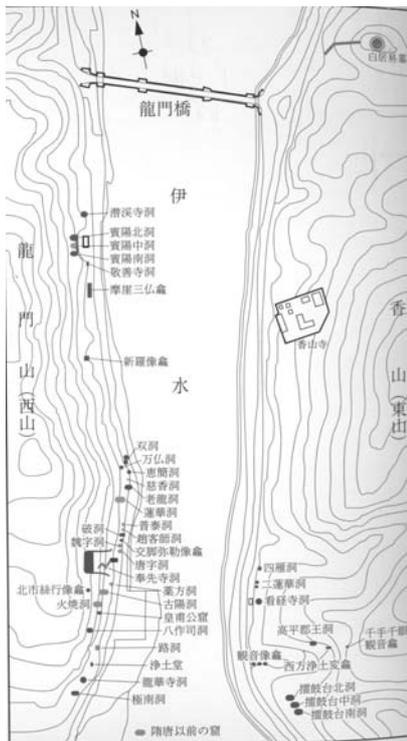


図 1 龍門石窟概観図

龍門石窟は(図1)、中国河南省洛陽市の南13km、伊水の兩岸に位置する。その外観が「闕」と似ているため、古くから「伊闕石窟」とも称されている。敦煌石窟、雲岡石窟と並び、中国三大石窟の一つに数えられる。

唐の貞観四年(630)に、太宗は詔して洛陽宮を定めた。顕慶元年(657)、高宗は洛陽を「東都」と改名し、「西京」長安(今陝西省西安市)と共に唐代の経済と文化の中心を担ってきた。顕慶二年(658)から弘道元年(683)まで、高宗と則天武后は、およそその半分に当たる期間、洛陽へ行幸していた。そして、弘道元年(683)高宗崩御後に、実権を握った則天武后は、光宅元年(684)洛陽を「神都」を改名した。そして、西安を避けるように洛陽を都としたので、その年から神龍元年(705)までの約20年間に、大足元年(701)から長安三年(703)まで以外の時期、洛陽は事実上の首都となった。それにともない、洛陽の郊外に造営された龍門石窟は、仏教文化の中心となったと考えられ、そこで彫り出された仏教造像は、初唐時期の典型様式を備えると考えられる。さらに、「西京」長安付近には大規模な石窟が存在せず、その周辺からの出土例も極端に少ないことから、龍門石窟は唐代の仏教美術を考察する際に欠かせない存在であるとされてきた。

1. 既往研究とその問題点

龍門石窟に刻まれた銘文について、宋時代以来、金石学者たちがその記録、収集をおこなってきた。しかし岡倉天心が1893年の中国調査旅行の際、龍門石窟の重要性に着目し、賓陽洞の本尊が日本の法隆寺金堂釈迦三尊の祖形であると述べたことから、日本人を含む多くの研究者たちがこの石窟の仏教造像に対して興味を持つこととなった。その後、フランスのシャバンヌが写真図版でこの石窟を紹介し(1907)、さらに日本の大村西崖、常磐大定・関野貞などにより調査研究がおこなわれた^{注1}。しかし、龍門石窟の考古学、美術史の方法を用いておこなわれた最初の本格的な研究は、水野清一と長広敏雄によるものである。1941年に出版された『龍門石窟の研究』では、龍門石窟西山の潜溪寺洞から極南洞までの28の石窟と、東山の看經寺洞、擂鼓台、万佛溝などの大型窟をそれぞれの造像内容、様式などについて、詳しく解説し、窟の主尊の尊格についても言及した^{注2}。また、同書には1047点の造像記が翻刻して収録され、これによって龍門石窟研究が大きく前進した。しかしながら、これらは第二次世界大戦中になされた調査であり、時間的な制約が大きかったこともあり、水野・長広によってなされた編年及び尊格判定については、再検討の余地が多いと考えられている。

1950年代には中国で、王去非により従来の水野・長広の論点に対して反論が提出された^{注3}。その後70年代末から、丁明夷、李文生、温玉成、宮大中、張若愚、李玉昆、常青らが相次いで論文を発表したことにより、中国においても龍門石窟の本格的な研究が深化し始める。中国では基本的に考古学の方法を用いて研究が行われる。丁明夷は龍門の唐代造像(主に如来像と菩薩像)の時代的変遷を整理した。温玉成は大型窟を中心とし、編年研究を行った。李玉昆は龍門石窟における造像銘について、整理と分析の作業を行った。その他、宮大中、張若愚、常青らも龍門石窟における特定の窟或いは特定な課題につ

いて、論考を発表した^{注4}。また龍門石窟に関する資料書と図録が次々と出版され、1994年龍門石窟研究所と中央美術学院美術系編『龍門石窟窟龕編号図冊』、1997年劉景龍、李玉昆主編『龍門石窟碑刻題記彙録』、が出版された。しかし近年もっとも注目すべきは、劉景龍と楊超傑によってなされた『龍門石窟総録』の出版である。これにより大型窟のみならず小型窟や小龕に至るまで編号され、またそのひとつひとつの窟龕の写真や書き起こし図、銘文の採録、さらに窟龕の位置を示す地図等が掲載されたことから、研究の環境が格段に整った。本研究もこの本の成果に拠るところが大きい^{注5}。さらに龍門およびその周辺の考古発掘も進み、龍門石窟に対するさらに全面的、そして細密な研究を行う時期を迎えといえよう。近年、李崇峰による東山の発掘が行われており、その成果の報告が期待される。

一方、日本では、水野清一・長広敏雄の『龍門石窟の研究』以後、長い間龍門石窟に関する研究が殆どなされなかった。この研究の水準があまりに高過ぎるということと、文化大革命により中国に入国することが困難であったというのが大きな原因である。そして、1980年代末になると、曾布川寛と岡田健が相次いで論文を発表した。その後またしばらく研究がなされなかったものの、2000年以降、久野美樹、八木春生によって新しい資料に基づいた新知見が発表され始める。久野美樹は、特に造像の思想の面に注目し、造像の造形と銘文を照らし合わせ、唐代の龍門造像の思想背景を検討した。八木春生は龍門唐窟の編年に注目し、新しい見解を提示している^{注6}。

このように龍門石窟の研究は、長期に亘り多くの研究者によってなされてきたが、これまでの唐代の龍門石窟に関する研究は、ごく一部の大型窟と小窟を対象として、その編年や図像学的な問題を中心に行われてきた(大型窟と小窟、龕の定義について、本論では、基本的に温玉成の定義を踏襲する。つまり、窟後室の高さ、幅、深さのうち、一つが300cmを超えるものは大型窟、二つが100cmを超えるものは小窟、それ以外のものは小龕であるとする)^{注7}。そのため、今日なお造窟時期に関して定説の無い窟も未だ数多く存在するばかりか、唐代の龍門石窟の半分以上を占める小窟龕については、ほとんど注目されることがない。大型窟を中心として導かれた龍門石窟唐代窟の特徴によって、龍門石窟唐代窟を代表させることに問題がないのか、問題がないにしても、それは小窟龕の考察を経て初めて言えることである。これまで1600点にもものぼる膨大な数から、殆ど誰も唐代小窟龕についての研究を行おうとはしなかった。しかし『龍門石窟総録』の出版により、研究の糸口は得られており、それゆえ唐代小窟、龕の分析を通じて龍門石窟唐代諸窟を評価することは、重要で意義のある作業で

あると思われる。

2. 本研究の目的と研究方法

繰り返し述べる通り、龍門石窟唐代窟、とりわけ小窟、龕は、数量が膨大であり、どれも類似しているとの印象があったため、これまで看過され、取り上げられることがなかった。しかし、これらを詳細に見ていくと窟龕の形式や像の様式、形式に連続性が認められ、そのため、それら小窟龕は、数の少ない大型窟より、編年作業に適していると言える。なにより、これまで大型窟だけで構築されてきた龍門石窟唐代窟の理解が、小窟、龕の研究が進むことにより、変化する可能性がある。従来、大型窟の水準が高く、小窟、龕の窟形式、造像様式の殆どは、その模倣であるとの見解は、先行研究において一致するところである^{注8}。

そこで本研究は、龍門石窟中、これまで殆ど注目されてこなかった数多くの唐代の小窟、龕を中心に取り上げ、それらについて考察分析を行う。その結果を基に、小型窟、龕と大型窟との造像を中心とした比較をおこない、類似と相違を明らかにする。そこから導かれた結論は、龍門石窟の唐代造像の全貌の正確な把握の基礎となることが期待される。また今後、同時期の山西地方や四川地方など他地域の石窟及び出土造像との比較を行うことで、地域間の交流とともに、龍門石窟の唐代仏教美術中の位置づけを明らかにすることができる。そしてこれは、龍門石窟の再評価とともに、唐代の仏教美術史を再検討するきっかけとなると考えられる。

3. 論文の構成

本論は、初唐時期における典型的な様式を表す龍門石窟の唐代造像、特にこれまで殆ど注目されてこなかった数多くの唐代の小窟、龕を取り上げ分析し、そこに大型窟の分析を加え、総合的な視点から唐代の龍門石窟における造窟活動を考察したものである。

(1) 第一章 唐代龍門石窟の概況と先行研究

本章では、龍門石窟における唐代の大型窟の紹介を行った。また、これまでのそれら大型窟に対する編年および図像学に関する先行研究を紹介した。

唐代の龍門石窟に関する本格的な研究は、20世紀40年代に日本の長広敏雄と水野清一の『龍門石窟の研究』により始まり、その後、日本と中国の研究者は長年間の努力を重ね、龍門石窟研究の土台を築いた。しかし従来の研究を見渡すと、主に大型窟を中心とした編年と、特殊な像の尊格比定に関する図像学的研究が行われてきた。編年研究のうち、特に680年代末から730年代まで

の窟の年代判定についての相違が大きいことが認められる。また、図像学研究において、特に「阿弥陀」と「釈迦」造像の尊格の判断について、議論が多いと認められる。

(2)第二章 唐代龍門石窟における小窟、龕について

本章では、先行研究において小窟、龕の研究が不十分である状況を鑑み、龍門石窟における紀年銘を持つ小窟、龕を概観した。

紀年銘を持つもののうち、673年の第565窟惠簡洞、675年の第1280窟奉先寺洞、680年の第543窟万仏洞以外は、殆どが小窟および小龕である。また、それら紀年銘を持つ窟、龕の本尊は、主に如来坐像であり、如来倚坐像や立像、単独菩薩像、優填王像などの数は相対的に少ない。これら如来坐像を概観すると、年代的特徴を最も明瞭に示すのは、如来坐像の着衣と台座形式であることが分かる

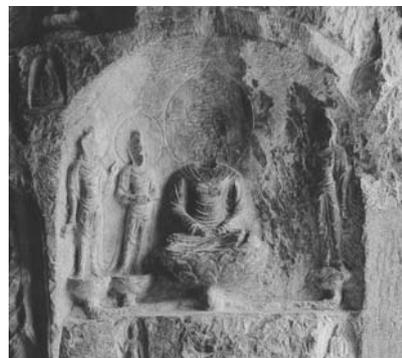


第1950窟 開元二十一年(733)



第1410窟 永昌元年(689)

図3 圓形束腰台座を持つ造像



第557窟 甬道 N9 龕 上元二年(675)

図4 同茎蓮華座を持つ造像



第118窟 貞觀十一年(637)

図2 方形台座を持つ造像



第101窟 永徽元年(650)

図3 梯形束腰台座を持つ造像



図2 第331窟韓氏洞 龍朔元年

(661) 方形台座を持つ造像

本尊の着衣形式は、台座と関係なく、660年代まではほとんどが双領下垂式で、670年代に通肩式が出現すると680年代に二つが併存する状態が続き、690年代以降は通肩が主流となる。また、武周期(690-704年頃)に、偏袒右型式袈裟も一時期に流行していた。

一方台座形式を見ると、1、方形台座(図2)、2、梯形束腰台座(図3)、3、方形束腰台座(八角形束腰のものを含む、図4)、4、円形束腰台座(數茄子ありものを含む、図5)、5、同茎蓮華座の五種がある(図6)。そして、五種の台座の時代的分布について、方形台座(637-647年頃)と梯形束腰台座(646-658年頃)が用いられる時期が短いと認められる。また、方形束腰台座は、集中的に造られる時期は顯慶二年(657)頃から680年代までであり、670年代中期以後の紀年銘造像に占める割合は、あまり大きくないことが認められる。そして670年代中期以後の紀年銘造像、特に小窟の場合では、最も多く採用されるのは円形束腰台座であった。また、670年代中期以後、龕の場合では、同茎蓮華座の作例が多いことが明らかとなった。

(3)第三章 龍門石窟における同茎蓮華座を持つ造像の考察

本章では、670年代中期から、「阿弥陀」銘造像において多く表される同茎蓮華座を持つ造像を取り上げ、それらを分析するところにより、奉先寺洞主尊頭光に表される同茎蓮華座を持つ造像の尊格を明らかにした。

唐代(618~907年)、浄土教は非常に流行し、阿弥陀信仰が盛んであった。それとともに、阿弥陀信仰に基づく仏教美術も数多く作り出された。そして、龍門石窟の場合は、造像記の研究によると、唐代に入ると、「阿弥陀」銘像が急激に増加し、銘文から知られる尊格としては最も多いものとなったことが指摘されている。龍門石窟の唐代では、「阿弥陀」銘像が最も多く作られており、147点が存在する。それに対して、「釈迦」銘像は僅かに11点で、13倍に及ぶ両者の数の違いは、あまりに大きい。しかしながら、先行研究において、両者の造形上の差異は、ほとんどないという指摘がなされている。それゆえ、銘文を持たない多くの像の尊格を判断する方法がほとんどない。

このような状況を踏まえ、筆者は、龍門石窟で670年代後半から700年代初頭にかけて、仏や菩薩、弟子像などが一つの茎から枝分かれする蓮華座に載る特殊な形式(「同茎蓮華座」)を伴う像が多く表されたことに注目した。奉先寺洞(675年)の主尊大盧舍那仏像の頭光の上部にも、この同茎蓮華座を持つ像龕(以下奉先寺小龕)が表された。龍門石窟における小龕、龕を中心として、それ以外にも西安、山西、河南、河北地方などに存在する関連図像を考察することで、670年頃これら地域ではすでに同茎蓮華座を備える阿弥陀仏像の作例が出現し、龍門石窟の工人はこれら地域における仏教美術と同じ情報を手に入れた可能性が高いと考えられる。このような状況において、龍門系統の工人により造られた奉先寺小龕の尊格は、阿弥陀仏と考えるのが最も妥当であると結論した。

(4)第四章 龍門石窟における円形束腰台座を持つ如来造像に関する研究

第二章の台座形式の分析から明らかなように、龍門石窟における670年代中期以後の小龕、龕では、円形束腰台座が多数用いられた。この形式の台座は最初期(660年代)には脇侍比丘像と菩薩像の台座として使用されていたが、670年代中期から、如来坐像が次第にこの形式の台座を採用するようになり、680年代に入ると急激に増加する。さらに、690年代からの小龕の主尊は、そのほとんどが円形束腰台座を持つようになる。一方、680年代以後の造営と考えられる大型窟の主尊は、依然として方形束腰台座(八角形束腰台座を含め)を採用してお

り、例えば第1931窟龍華寺洞、第1628窟八作司洞などがその例として挙げられる。

本章では、龍門石窟における本尊が円形束腰台座に坐す小龕龕を取り上げ、その台座の出現と発展の過程を分析した。また、これら円形束腰台座が流行する以前、680年代に本尊が円形束腰台座以外の座に坐す小龕(具体的には本尊が方形台座に坐す窟)に対する考察を加えた。その結果、680年代の小龕の造営は、依然として方形束腰台座を持つ如来坐像の作例を中心としていたと考えられる。しかしながら、690年代に入ってから、小龕の造営中心は円形束腰台座を持つ如来坐像のものに移した。また、690年代から、円形束腰台座の作例において最も数の多い第三類造像(束腰部に敷茄子なし、裳懸座なし)が、定型化する傾向があったと考えられる。

その定型化が行われた原因について、先行研究ですでに指摘されているように、その時期、大型窟の造営中心が東山へ移動したことにともない、元来西山で造営活動が行われた工人が東山に移したことと関わると思われる。

(5)第五章 武周期(690-704年頃)の龍門石窟における造営活動に関する研究

弘道二年(684)に、則天武后は中宗を廃立し、実権を握った。その年に洛陽を「神都」と改名し、事実上の首都とした。則天武后は皇帝になるため仏教の力を利用した。載初元年(690)国号を「周」とし、武周王朝を開く。そして同年、天下に各州に大雲寺を建て『大雲經疏』を頒布し、さらに載初二年(691)則天武后は仏教を道教の上位にするという政策を發布した。以上のような状況より、武周期の仏教は、高宗期のそれよりも一層に盛んであったと考えられる。

しかし残念ながら、この時期の遺品はさほど多くない。龍門石窟の場合では、この時期に東山における第2062窟播鼓台北洞、第2055窟播鼓台中洞(大万伍千仏龕)、第2050窟播鼓台南洞、第2144窟高平郡王洞、第2211窟二蓮華南洞、第2214窟二蓮華北洞、第2194窟看經寺洞という7つの大型窟が造営された。

本章では、東山におけるこれら7つ大型窟を中心とし、それに西山における小龕を加え、武周期の龍門石窟で行われた造営活動を考察した。その時期の東山では、大型窟の造営が盛んであり、造像形式はこれまで西山の造像に見られる形式を受け続けたが、新しい題材と窟形式も出現した。一方、西山では、大型窟が殆ど作られず、円形束腰台座を持つ如来坐像を主尊とする小龕の造営が活発であった。つまり、東山と西山の造営活動が分化されると認められる。そして、分化された原因については、八木春生が指摘した通り、元来西山で活躍していた、大

型、中型窟を造営していた工人たちが、東山に移動してしまっただけと考えられる。

(6)第六章 武周期以後(705年以後)の龍門石窟について

本章は、武周期以後の龍門石窟における造営活動を考察した。その結果、その時期の龍門石窟では、これ以前と比べると、大型窟の造営が少なくなることが明らかとなった。また、数の減少のみならず、先行研究ですでに指摘された通り、それら大型窟、特に西山南端における大型窟は、形式上にあまり大きく変化がなく、定型化が起きたことが認められる。

武周期の東山の大型窟における造像の造形は、その後の西山の大型窟と共通する点が見られることから、八木春生は武周期の東山で活動している工人は、武周期以後に西山へ次第に戻っていった。そして武周期と異なるのは、その時期に、大型窟と小窟とは、お互いに影響関係も見られるようになることである。

一方、武周期の東山の大型窟より出現した新しい窟形式や造像題材などは、その後の東山と西山の諸窟に見られない。このことから、武周期に東山のこれら大型窟の特異性を見出すことができる。この7つ大型窟は、恐らく李崇峰が指摘した通り、則天武后は地婆訶羅の逝世を記念するために設けられた香山寺に属する「石像七龕」に当たると考えられる。しかしながら、この7つの窟は則天武后と如何なる関係であるか、現段階では不明瞭である。

4. まとめ

筆者の以上の考察により、武周期以後の龍門石窟では、大型窟の造営が少なくなる一方で、小窟の造営は、武周期から玄宗の天宝年間にかけて盛んで行われたことが明らかとなった。ここに、龍門石窟に大きな変化が現れたことが理解され、とくに武周期終了後、小型窟や龕を穿った工人系統が主体となったことが理解された。言い換えれば、武周期以後、龍門石窟は庶民の石窟となったのである。注目すべきは、武周期には東山で、則天武后との関係が窺われる7つの大型窟が開かれたことである。これにより、西山に残された工人たちが、龕だけでなく小窟の造営も手がけるようになった。そして則天武后の退位の後、東山から戻ってきた工人たちは、その重要なパトロンを失い、勢いを取り戻せず、彼らにより開かれたいくつもの大型窟の造像には、小窟や龕からの影響が見られるようになる。

これまでの研究では、武周期終了以降に開かれた窟についての研究は少なく、龍門石窟の造営の末期のものとして無視される傾向にあった。しかし本研究により、大

型窟や小窟、龕の造営に携わる工人たちとは異なり、小窟、龕を開いた工人たちの集団が存在したことを明らかにした。また、東山に造営の主体が移った時期から、750年代にその造営が終結するまで、西山ではそれらの工人たちが主流となり、彼らによって龍門石窟唐窟の多くが穿たれたことを明らかにした。つまり、龍門石窟が基本的には、皇帝や貴族のための大型、中型窟を開く場所ではなく、庶民がおそらく亡き父母などの冥福を祈るために龕を開く場所であったことが理解されるようになった。

本論では、唐代の龍門石窟における窟や造像の形式に重点が置かれて考察し、膨大な数の造像記に対して、殆ど紀年銘と尊格銘のみ関心を寄せた。しかしながら、それら紀年銘は、造像の発願者や造立意図など情報を記録し、文字資料として貴重な価値が備われる。今後、筆者は、それら造像記の考察も行う。また、同時期の他地域の石窟及び出土造像との比較を行うことで、地域間の交流注目しながら、研究を進めたい。さらに、本論文では、造像の尊格について、検討が不十分であることから、今後、図像学の研究も行いたい。それらの研究により、龍門石窟の全貌を明らかにすることが期待される。

注

- 1) Édouard Chavannes : Mission archéologique dans la Chine septentrionale, Publications de l'École Française d'Extrême-Orient, XIII, 1909-1915. 大村西崖 : 支那美術史彫塑篇、国書刊行会、1915. 常盤大定、関野貞 : 中国文化史蹟、法蔵館、1925-1931.
- 2) 水野清一、長広敏雄 : 龍門石窟の研究 : 河南洛陽、座右實刊行會、1941.
- 3) 王去非 : 關於龍門石窟的几種新發現及其有關問題、文物參考資料 (2) pp. 120-127, 1955.
- 4) 丁明夷 : 龍門石窟唐代造像的分期与类型、考古學報 (4)、pp. 519-546+561-572, 1979. 温玉成 : 龍門唐代窟龕の編年、龍門石窟 二、平凡社、1987. 李玉昆 : 龍門碑刻的研究、龍門石窟研究論文選、上海人民美術出版社、1993. 宮大中 : 龍門石窟芸術、人民美術出版社、2002. 閻文儒、常青 : 龍門石窟研究、書目文獻出版社、1995年、など.
- 5) 龍門石窟研究所、中央美術學院美術史系編 : 龍門石窟窟龕編号図冊、人民美術出版社、1995. 劉景龍、李玉昆主編 : 龍門石窟碑刻題記彙録、中国大百科前書出版社、1998. 劉景龍、楊超傑主編 : 龍門石窟総録、中国大百科全書出版社、1999.
- 6) 曾布川寛 : 龍門石窟における唐代造像の研究、東方學報 (60)、pp. 199-397, 1988. 岡田健 : 龍門石窟初唐造像論—その一 太宗貞觀期までの道のり、仏教芸術 (171)、1987. 龍門石窟初唐造像論—その二 高宗前期、仏教芸術 (186)、1989. 龍門石窟初唐造像論—その三 高宗後期、仏教芸術 (196)、1991. 久野美樹 : 唐代龍門石窟の研究 : 造形の思想的背景について、東京 : 中央公論美術出版、2011年. 八木春生 : 龍門石窟第1280窟(奉先寺)の再評価について、中国考古学 (14)、pp. 165-191、日本中国考古学会 編、2014、龍門石窟敬善寺洞地区造像に関する一考

察、泉屋博古館紀要 (30)、pp. 27-51、2014、龍門石窟唐前期諸窟中に見られる浄土表現について：第 2144 窟(高平郡王洞)および第 2139 窟(西方浄土變龕)を中心として、泉屋博古館紀要 (31)、pp. 47-71、2015、龍門石窟賓陽南洞の初唐造像に関する一考察、芸術研究報 (33)、pp. 13-24、2012、關於龍門石窟西山南部地区諸窟的編年、石窟寺研究 (6)、2015。

7) 温玉成：龍門唐代窟龕の編年、龍門石窟 二、平凡社、1987。

8) 丁明夷：龍門石窟唐代造像的分期与类型、考古学報 (4)、pp. 519-546+561-572、1979。李崇峰：龍門石窟唐代窟龕分期试论-以大型窟龕为例、石窟寺研究、pp. 58-65+62+1-4+63-150、2013。